

口腔習癖

見逃してはいけない小児期のサイン

河井 聡

医歯薬出版株式会社

理想的な歯列の発育

5歳3カ月(女兒)



12歳6カ月



乳歯列は、「永久歯」との交換によるスペースを補えるような生理的空隙をもつ「空隙歯列」が理想である。空隙歯列に対し適切な口腔機能による圧力が加わりつづけられれば、一歯ずつ萌出してくる永久歯は自然に移動し、理想的な永久歯列をつくりあげる。この症例では適切な咬合接触、適切な咬合高径と被蓋関係、そして偏りのない正中を獲得した理想的な永久歯列に交換した

開咬

「開咬」とは、上下の歯の間に異物を挟み込むことによって、歯軸が唇側に傾斜し、部分的に上下の歯の接触が妨げられている状態を指します。挟み込む異物の種類によって、指しゃぶり、咬爪癖、物しゃぶり（おしゃぶり、タオルなど）、舌癖（異常嚥下癖、舌突出癖、弄舌癖、構音障害）、咬唇癖など、さまざまな口腔習癖に分類されます。また、口呼吸や舌小帯強直症などの二次的原因で舌が低位になると、舌が必然的に上下顎前歯の間に位置されやすくなるため、舌癖が誘発されます。

2017年に当院に初診で来院した1～12歳までの小児患者156人のうち、確認できただけでも58人に開咬の所見がありました。開咬の頻度としては初診の1/3超となります。開咬の程度はさまざまで、「どの程度から問題視していくか」ということに関しては難しいですが、健診の段階で悪い兆候を早期発見し、なるべく小さいころから予防的に指導をしておくことが重要と考えています。

本章では開咬の原因として、特に問題となる指しゃぶりと舌癖、およびそれに付随する口腔習癖について解説します。



開咬と指しゃぶり

指しゃぶりとは？

指しゃぶりには不安や緊張を抑制する効果があるといわれており、ピークは1歳半から2歳ごろです。この時期の指しゃぶりは口腔周囲筋の発達にもつながり、むしろ発達段階において自

然な生理的行為ですが、その後もやめられない子どもがいます。不安や緊張を感じたときなどに心を落ち着かせるためにすることが多く、指しゃぶりの傾向がある場合、歯科医院への来院時のように不安な状態のときは特によく目にします。

症例①



1歳11カ月、女兒。指にたこができるほどの指しゃぶりがあるが、咬合接触は甘いものの開咬ではなかった。指しゃぶりの程度は指の状態でも判断している



2歳9カ月時、指しゃぶりが続き、大きく開咬になっている。しゃぶる力によって歯列、顎骨は変形し、上顎は歯列がV字型に狭窄する

症例②



3歳1カ月、男児。右前方から右親指を突っ込む指しゃぶりがみられ、親指にはたこがある。指しゃぶりの影響で右前方への開咬がみられる。また右から指を入れるため、左側への正中のずれもみられる



4歳3カ月時、この症例では舌癖に移行しなかったため、指しゃぶりが改善するとすみやかに歯列も改善した。ずれていた正中も合ってきている。機能に問題がなければ小児の歯列は驚くほどの改善を示す

図2-1 指しゃぶりによる口腔への影響

指しゃぶりは乳児からみられる、周囲から見ても非常に把握しやすい口腔習癖の1つである。しゃぶり方（強さやしゃぶる指の違い、方向など）により、歯列や顎骨への影響はさまざまである

正中のずれ

「正中のずれ」は、上顎前歯と下顎前歯の正中が左右どちらかにずれている状態を示しています。「正中のずれ」が生じる状況は2つのパターンがあり、「顎骨に対して歯の位置がずれているのか?」「上顎に対して下顎の顎骨の位置関係がずれているのか?」で、原因も対処法も大きく異なります。「歯の位置ずれ」は歯の萌出の問題などが原因で口腔習癖は関係がありませんが、「顎骨の位置関係のずれ」は偏咀嚼などの口腔習癖が原因となっており、鑑別が必要です。

2017年に当院に初診で来院した1～12歳の小児患者156人のうち、確認できただけでも63人に正中のずれを疑う所見がありました。頻度としては、初診の40%以上となります。小児期から健診などでずれの兆候を早期発見し、正中のずれを悪化させないよう、生活習慣改善の指導をしておくことが重要と考えています。たとえば食べ方、寝方などの影響が現れやすいので、食事の席や寝る場所をときどき交換するなど簡単にできることから指導していきます。

本章では「歯の位置ずれ」が原因である「正中のずれ」との鑑別診断と、「顎骨の位置関係のずれ」の原因となる口腔習癖について解説します。



症例④多くの形態の問題、機能の問題を抽出し、一つひとつ解決していった症例



8歳10カ月、男児



10歳6カ月時



11歳1カ月時

2年3カ月の経過から問題点としては
 徐々に被蓋が深くなってきている：咬合力が強く、クレンチングがあった
 正中が右側にずれてきている：右偏咀嚼、左から頬杖の習癖があった
 着色が付きやすい：アレルギー性鼻炎による口呼吸と、口唇閉鎖不全があった



11歳10カ月時、この時点で叢生など歯列に対する訴えもあり、本格的に機能訓練に取り組むこととなった。「歯列(形態)の問題」と「口腔習癖(機能の問題)」をピックアップしてみると以下ようになる。

